平成八年六月一日発行（毎月一日一回発行）

經濟論叢

第157巻　第5・6号

会計的認識と実現概念の拡張問題……藤　井　秀　樹　1

ドイツ排水課徴金制度の経済分析……諸　富　　徹　16

多国籍企業と資本の集積・集中の現段階……有　賀　敏　之　35

公害健康被害補償制度成立過程の
　政治経済分析……松　野　　裕　51

米国輸出入銀行の途上国経済
　インフラストラクチュア整備支援政策の展開…中　西　泰　造　71

《研究ノート》

内田義彦とイギリス思想史研究……田　中　秀　夫　89

平成8年5・6月

京都大學經濟學會

経済論叢（京都大学）第157巻第5・6号，1996年5・6月

《研究ノート》

内田義彦とイギリス思想史研究

田　中　秀　夫

はじめに

「内田義彦の思想と学問」を共通テーマとするこの催しにおける，報告者の役割は「内田義彦とイギリス思想史研究」というクロスする座標軸において内田義彦の仕事を振り返ってみることである。内田義彦はこの学会の巨匠であった。内田義彦はこの学会の大部分の会員にとって直面しなければならない課題であったとおもわれる。内田義彦のイニシエーション，あるいは内田義彦体験をそれぞれの会員がそれぞれにもっているものと思われる。報告者はもとより内田義彦の研究を行っているものではないし，一人の読者にすぎない。そして特別に開陳するに値する意見をもっているわけではない。したがって，報告者が与えられたテーマについて以下に行う報告の意図は，参会者各自の内田義彦体験を振り返っていただく切っ掛けとなり，午後の討論において，参会者各自にとって内田義彦の思想と学問がいかに受け止められてきたか，そしてそれはいかに継承されるべきかについて，率直な意見を表明していただく呼び水（挑発者？）となることである。報告者はこの学会の先輩，同世代，若い世代のなかに傾聴に値する様々な見解があると思う。

I　内田義彦への道

スミス研究とマルクス研究という二つの中心（河上肇研究をもう一つの中心とみる見方もある）をもつ内田義彦氏の経済学史・社会思想史研究は，（戦前）戦後日本の社会と文化そして精神のありようへの激しい関心，鋭い批判意識と結びついて豊かな著作を生みだした。

昭和20年代前半生まれの世代にとっては，内田義彦はまずもって『経済学の生誕』（1953年，増補版1962年）の著者であると同時に『「資本論」の世界』（1966年）の著者であった（手もとの『「資本論」の世界』の表紙裏には，昭和42年4月28日読了と記入

している。大学に入学して直後に読んだ一冊が本書であったようである)。経済学史の著作としては異例の，文芸批評風の文体・語り口調（――文は人なり――）によって，なまなましくスミス経済学の形成を描いた『経済学の生誕』は，60年代の後半――この時期は初期マルクス研究の爆発的流行に始まるマルクス・ルネサンスの時期であり，宇野理論が急速に普及する時期であり，また大塚史学の全盛の継続期で，ウェーバー研究も非常に盛んであった。したがってまた「市民社会論」も流行した――に出た『「資本論」の世界』のポジティヴなマルクス解釈に補強されて，生産力の体系としての「市民社会」の概念を手掛かりに，スミス経済学とマルクス経済学の共通面を，その差異とともに浮き上がらせた。市民社会の確立のために前期的勢力と闘うスミス。市民社会のポジティヴな評価にたってなおかつその資本主義的形態―生産諸関係を克服すべきとしそれと闘うマルクス。この二つの像は，二重写しとなって脳裏に焼き付いた。この二つの著作が，内在的なテキスト研究によって，十分に独自に消化しきって書かれた著作であることを理解するには，さしたる努力を必要としなかった。

しかし内田義彦氏の著作が日本社会の現在と将来を見据え，過去から現在に至る歴史過程の批判的分析を踏まえて，現在何が問題なのかを追及する作業の一環として書かれていることを深く認識するためには，上の2冊を漫然と読むだけでは不足であった。そのためには，『潮流』などに戦後直後にしばしば匿名で書かれた初期論説を読むことが是非必要であった。青焼きで回ってきた山崎怜氏作成の「著作目録」が非常に役に立った。

II 内田義彦を養ったもの

今では『内田義彦著作集第十巻』によって体系的に，クロノロジカルに読むことのできる初期著作は，経済学史家，というより戦後知識人――戦後啓蒙（杉山光信）――の旗手の一人としての内田義彦の出発点を明確に教えている。初期の内田はすこぶる講座派的である。もちろん講座派自体にニュアンスがあったが，注目すべきことに内田義彦は講座派最高の達成と目された山田盛太郎の『日本資本主義分析』を高く評価したが，山田のブルジョア合理主義的論議を，急進的立場から批判もした。盲従はしなかった。

「氏が日本農業に啓示したこの革命――小作関係を解消して小農範疇を打ち出し，これに技術を与えて経営を拡大せしめ，資本制農業を打ち出そうという――は，その表現の様式においてもはなはだ農林省的であって，ケネー時代の小ブル農民の要

求に応えることはあっても，今日の革命の主体たる日本のプロレタリアート貧農を起たしめるものではなさそうである」(10，170-1ページ)。(「市場の理論」と「地代範疇」，1949年6月)

ただし，ここでの内田がレーニンの立場に自己をアイデンティファイし，「労農同盟によるブル・デモ革命」(173ページ) を展望しようとしていることは，意味深長であるし，複雑な気持ちを押さえがたい。

山田が絶対的権威でなかったように，大塚久雄もまたそうであった。内田は大塚による「前期的資本」と「産業資本」の峻別に決定的な意義を認め，産業資本の生産力的性格の認識を高く評価したが，同時に，大塚がアメリカ型の発展をイギリスにおいて実証したように (――イギリスがアメリカ型とは奇妙でないか――)，プロシャ型の発展を「法則」的に展開すべきであること，大塚のエートス論が価値論から遊離し，マルクスはおろかスミスからさえ後退していることを批判した (107-8ページ)。

「スミスにおいても下層および中産階級と上流階級との「利己心」が倫理的性格の有無によって「峻別」され (アメリカ型とプロシャ型との対比！)，生産的倫理の故に下層階級の利己心にのみ近代社会の形成の原理が認められているが，それは何よりも「正義＝等価関係の維持」と結びついて考えられている。すなわち，下層階級の間では，等価関係の維持が強制的に働いて，利己心の発揮を生産的なエトスに結びつけ，ここにマニュファクチュア的分業等が行なわれてくるという関係が見られる。さらにマルクスにおいては，絶対的剰余価値の生産から相対的剰余価値の生産への移行は労働者の運動 (等価関係！の維持) と明白に結びつけられている。しかるに教授にあっては正常的発展の場合，生産的倫理は価値論から切りはなされ，資本家階級の生産倫理，労働階級の生産倫理として，労使相共にいそしむ関係におかれている。」(「大塚久雄教授『近代資本主義の系譜』」，1947年7月)

この引用文は多くのことを物語っている。スミスが下層階級の利己心に近代社会の形成原理を認めたという理解は大河内一男氏の解釈の踏襲であること。マルクスにおいては，絶対的剰余価値の生産から相対的剰余価値の生産への移行は労働者の運動と結びつけられているという論点は，やがて『『資本論』の世界』が説得的に敷衍する重要な論点となる。そして末尾の労使一体把握批判も，文字通り時代の制約を感じざるをえないものだが，今日ではそっくりそのままこれを踏襲しようというひとは少ないであろう。内田義彦は，このように戦闘的であった。

1948年1月に「価値法則の実現」を論じて，大河内の社会政策からする労働力保全の要求を好意的にふりかえるとともに，風早八十二の階級闘争によってしか労働力の価値通りの売買は実現できないという，より政治的な主張を好意的に紹介した内田はこう書いている。「労働者を先頭」にする「国民経済の真に生産力的な展開」と「革命の平和的進行」とが実現しつつある，と（「戦時経済学の矛盾的展開と経済理論」10，118ページ）。ブルジョア民主主義革命の客観的情勢は成熟しているというのである。

こうして，内山義彦氏は27テーゼ，32テーゼに触発され，日本資本主義発達史講座とマルクス，レーニンそしてスミスに深く影響され，養われた戦後派知識人として戦後間もない時期に登場したのであったが，内田義彦を養ったのはこれがすべてでない。また内田はこのような時論家に終始したのでもない。いかに犀利とはいえ，時論は政治的パンフレットを越えるものではない。パンフレッティアに終始するには内田は多くのものをすでに身につけ過ぎていた。すなわち，よく知られているように，武谷・星野の技術論，木下順二，山本安英との交流からの演劇，丸山真男との関係での日本思想史の諸問題，そしてベートーヴェンを始めとするクラシック音楽もまた内田義彦を豊かに養った。ドラマトゥルギーへの関心とドイツ音楽への心酔は内田義彦というパースナリティーにおけるデモーニッシュなものを物語っているであろう。

リジッドな講座派理論青年の内山義彦は，「手紙のローザ・ルクセンブルグ」に示されたような評論家的表現力を備えていた。直感の鋭利，分析の的確，思考の強靱，そして文章の華麗，こうした力量を備えた内田義彦の処女作が名著『経済学の生誕』として実現したのは，「生誕まで」の内田の歩みを辿るものには，理解可能である。

しかし，内田におけるデモーニッシュなものは暫くおいて，戦後という時代に，スミスとマルクスを繋ぐ労働価値論——生産力論と一体となった——を市民社会の形成原理として提示するという営みは，荒廃から立直って，高度成長＝エコノミック・アニマルを実現していく日本資本主義のダイナミズムにたいして，どこまで有効であっただろうか。農地解放→小農・自作農創設という方向に始まった戦後の農政は，資本主義的農業への発展を導いたとはいえないにしても，食料と労働力の供給拠点として高度成長を支えることになって行ったのであって，農林省的発想はむしろ根を下ろしていった。それにたいして，逆に，資本主義に対する批判的論議としてのマルクス主義は没落して行った。

戦後啓蒙の課題がマテリアリズムによって押し流される思想風土のなかで，そしてま

た専門化・分化がいよいよ激化し，様々な学問分野間でのディスコミュニケーションが顕在化するなかで，内田義彦が見つめたものは，日常的意識の批判的捉え直し——市民社会の確立——以外ではありえなかった。

「生産力の解放と市民的自由をどう結びつけるかは，単に歴史的な問題ではなく現代の問題であり，それも体制を越えて社会主義における問題ですらあり——社会主義における市民社会という発想，逆にいえば，市民社会の発展の系列における社会主義という発想を考えよ——，そうした問題を，人間と自然との代謝過程の分析を通じて照射することは，今日の経済学に課せられた大きな学問的課題である」(「アダム・スミスと日本の思想的状況」1965年，5-221ページ。)

こうした主張を介して，やがて，〈自前の概念〉による社会認識，〈日常語〉から科学への通路をいかにして確立するかという問題——社会科学の方法にまつわる問題——が内田義彦氏の関心の中心を占めるようになっていくのは，必然のように思われる。

『「資本論」の世界』1966年，『日本資本主義の思想像』1967年，『社会認識の歩み』1971年，『読むということ——内田義彦対談集』1971年，『学問への散策』1974年，『作品としての社会科学』1981年，『読書と社会科学』1985年。こうした内田義彦の作品は，自前の社会認識，社会科学はいかにして可能かを模索した努力として理解できよう。内田義彦は学史を素人学問に堕落させたという批評もこうして生まれることになる。それが当たっていようといまいと，いずれにせよ内田義彦は，経済学史の専門家に向けて，著述しなかった。国民の社会科学的認識を次第に強調するようになっていった内田義彦は，そもそも，読者として，専門の垣根をとっぱらって，それぞれの持ち場で，変革の努力を行っている国民を念頭におくことが多かった。したがって作品としては専門書と啓蒙書という区別を否定する作品を目指した。内田義彦は学界を越えた戦後啓蒙の思想家であった。

いささか前置きが長くなったが，それでは報告者の分担する問題に議論を進めることとしよう。

III　内田義彦とイギリス思想史研究

この問題設定は多義的である。(1) 内田義彦にとってイギリス思想史研究はどのようなものであったのか，そしてそれはかれの学問の展開のなかでいかなる位置と比重を占めるのか。(2) 内田義彦は従来のイギリス思想史研究の蓄積をいかに利用したか，その

継承と批判の実態を問題にすることもできる。(3) 内田義彦がおこなったイギリス思想史研究は戦後の我が国におけるイギリス思想史研究のなかで，いかに独自であったか，と問うてもよい。(4) そして現在と将来のイギリス思想史研究にとって，内田義彦の仕事をいかに継承すべきか，またできるか。大略，こういった問題に区分することができよう。しかし，この問題設定自体は，報告者がたまたまイギリス思想史を専攻しているということから選びだされたものに過ぎず，問題設定として，内田義彦の本質に迫る手段としては拙いという印象を否定できない。

(1) 内田義彦にとってイギリス思想史研究は日本研究——内田が日本研究において学んだのはとりわけ丸山真男であったように思われる（内田は日本の政治文化の研究における柳田国男，神島二郎の研究に無関心であった）——への迂回的手段であった。内田義彦は日本における「市民社会」——独立した市民が主体的に構成する民主的な社会——の確立の方途の追求が自らの生涯のテーマであるかのように常に語ってきたし，それには偽りはなかったと思われる。そのような使命を与えられたイギリス思想史研究はスミス中心につかまれた。ホッブズ以来の経験論の伝統の中から，価値論と再生産論という市民社会の物質的基礎過程の認識用具を編みだしたスミスの自然法思想→経済学が抽出されたことによって，そしてスミスの学問成果が（リカードを介して）マルクスに批判的に継承されるというパースペクティヴにおかれることによって，イギリス思想史研究は内田義彦にとって，マルクスに継ぐ地位を与えられた。もっとも，内田義彦の学問の展開は，初期には（少なくとも表だっては）マルクスとレーニンが最高の権威とされていたところから，次第に力点をスミスとマルクスへ移してきたように見えるし，スミスとマルクスの相対的評価も次第にスミスがマルクスに肩を並べる方向に上昇したように思われる。独立した市民のつくる民主主義的な社会を内田義彦はつねに理念として語っているが，それは西欧とりわけイギリスに結びつけられている。

(2) 内田義彦は研究史を重視する学史家ではなかった（構造主義，経済人類学その他の新潮流にも関心を示さなかったが，それはなぜであろうか）。『経済学の生誕』は比較的に専門的研究文献を多く利用している方の著作であるが，その利用の仕方はバランスのとれたものではない。研究史をバランスよくサーヴェイして，文献的基礎を固めて手堅い論証を積み重ねるということは，行われていない。おそらく『生誕』執筆時点においては今日のようにふんだんに研究文献があるわけでもなければ，戦中・戦後の情報ギャップ——洋書の輸入困難——が，研究を大きく制約したであろう。しかしながら，

そうした制約に余り煩わされずに，（水田洋氏が指摘するように）少数の二次文献を巧みに利用しつつ，内田義彦はスミスの著作を熟読し，大胆な仮設を提示して，斬新で生き生きした新しいスミス研究を樹立した。生気に満ちた，躍動感のみなぎる散文によって旧帝国主義に死刑宣告するラディカルな，力強いスミス，懐の深い強靱な理論家スミスが描きだされた。そのスミスはルソーの文明批判を十分に受けとめて優れた生産力認識にたって説得的な反論を展開したのだとされた。

内田義彦のスミス研究は独創的な業績である。その独創はテクストを鋭く読む，いわば勘の冴えに支えられたものである。だとすればイソテリックなこの手法は継承は容易でない。思想史上の文献を読むさいの勘を鍛えること，そういう修練が可能として，それ以外に方法はないであろう。加えて，他人に真似のできない優れた文体によってこの独創的業績は支えられている。たんたんと語られてはいるが，日本語の散文としては幾分過剰なレトリックが駆使され，刺激的な論議が，迫力を伴って展開される。『生誕』前編はクラシック音楽のようにドラマティックである。劇的効果が狙い通りに実現されている。18世紀のイギリス。ヨーロッパの覇権と植民地支配権を争った旧帝国主義戦争としての英仏7年戦争に集約された文明社会の危機。，アンシャン・レジームを克服しつつあったイギリスが勝利し，克服できなかったフランスが敗北する。こういう背景のなかでフランスに旧体制を批判するルソーやディドロのような新しい思想家が登場し，スコットランドの哲学者スミスは深い関心をしめす。文明の危機を克服する理論の模索がこうして始まる。ヒュームとスミス。ルソーとスミス。そしてブルジョア・ラディカルとしてのスミスの経済学が成立する。

『生誕』後編は同じようには言えない。ここでも独創性は語ることができるかもしれないが，もはやここにはドラマはない。後編はマルクスに引照した純然たる学史的分析が展開されているが，しかし中断で終わっている。

(3)　内田義彦のスミス研究が戦時下に結実した大河内・高島の生産力論としてのスミス研究を継承するものであることは，よく知られている。しかし，今述べたように，内田義彦のスミス研究はきわめて独自なものであった。スミスとルソーの関係についての着眼の，独創性と先駆性――欧米では今日ようやくにして本格的な検討の論点となっている（注を参照）――は高く評価されるべきものである。しかし，スミスを除けば，内田義彦のイギリス思想史研究は，多くの示唆的な発言と啓発はあるけれども，少なくとも専門の学としては特別の大きな実りをもたらしたようには思えない。戦後の我が国の

イギリス思想史研究のなかで独自であったのは内田義彦の場合はスミス研究である。それはそういうものとしては，水田洋のホッブズ研究，小林昇のタッカー，ステュアート研究などとともに国際的水準の業績であるといっても過言でないだろう。しかし，水田，小林がそれぞれの通史的展望を幾多の一次文献のクロノロジカルな分析を通して獲得し，実際その通史——Historiography——においても独創的であったのに比して，内田義彦の場合，スミスの前後は弱い光で照らしているにすぎない（『経済学史講義』1961年は通史への道を試みたものであったが，不十分に終わっている）。そしてまた『生誕』は，ヒュームの評価，スミスの生産力認識と階級的地盤の認定という点で疑問の余地を残している。にもかかわらず，『生誕』は書物として，パフォーマンスとして圧倒的な名著であり，研究として以上に評伝として後世まで読み継がれる可能性をもっている。「……『生誕』だけがアダム・スミスの思想的・学問的立体像を十分な迫力で描き切ったブリリアントな業績であ」る。（小林昇）

『社会認識の歩み』はイギリス思想史に帰属するというより，むしろ近代ヨーロッパ思想史入門なのであるが，思想史の読み方を手ほどきする内田義彦の力量は抜群である。素材的には水田洋がつとに手がけたものという印象のある作品であるが，内田の手によって古典的文献が見事に面白い作品としての姿を見せるのである。目から鱗が落ちたのは報告者一人ではないであろう。これはまさに内田義彦の独創的な手法である。それは内田義彦の思想史の方法なのであって，既に『生誕』で効能は試し済みであり，『歩み』以降にも駆使されるであろう。〈読む〉という言葉はアルチュセールに先立って内田義彦のキー・ワードである。

IV 批判と継承

『生誕』は初版以来40年近くの間，我が国のスミス研究のモノグラフとして頂点に君臨してきた。これは稀有なことである。だとすればこの間の40年のスミス研究は何だったのか。しかし，実はこの40年間，スミス研究者も個々に研究を推進してきたし，イギリス思想史研究も長足の進歩を遂げた。にもかかわらず，そうした印象があるのは，そうした研究成果を統合したジン・テーゼが未提出だからである。イギリス思想史についても日本人の手になる新しい広い展望を与える Historiography が待望される。

内田スミス論に対する最も手強い批判は小林昇氏から提出された。そして内田—小林論争は，二人の巨匠のそれぞれの研鑽によって，小林昇経済学史学と内田義彦思想史学

の体系をもたらした。しかしスミスとステュアートの対立が抽象的であったのとは別の意味で，内田―小林論争は抽象的であった。大塚史学にルーツの一つをもつ二人の巨匠の学問は決定的に問題意識と手法を異にした。日本に市民社会をという内田義彦の問題意識に対して，小林は経済学者の専門的禁欲に投じた。経済学の形成時代の解明，後進国の経済学の宿命の解明によって小林昇が追求したのは国民大衆の安定した生計を可能にする国民経済のありよう，ザインとゾレンであった。理論―思想のフィードバックと理論―政策―歴史の総合的解明。Canon の徹底的な読みと広範な一次文献の読破および二次文献の批判的利用。小林氏は，とりわけステュアートとタッカーと重商主義パンフレッティアー達の経済論争を洗いだすことによって，スミス経済学の学史的・相対的地位を明確化するとともに，『国富論』自体の内容も深く究明したのだが，こうした実証的な小林昇の業績は，遂に内田義彦の顧みるものとはならなかった。その意味で内田の最大の批判者は孤独であったように見える。

(4) ではイギリス思想史研究において内田義彦の研究業績をいかに継承するべきか，またできるか。能力の問題は別として，テクストをとことんまで徹底して読み，納得できるまで文章に推敲を重ねるということは，重要な教訓である。コネ型人間を嫌悪した内田義彦はパーリア力作型の作風も否定したのであるが，そのことは暫くおいて，内田義彦の作品が（全てではない）面白いこと，啓発的であることは異例に属する。解説を拒否し，作品としてのコスモスを論説に追求したあくことのない貪欲，そしてまた傲慢をいかに真似ることができるか。それをできるかぎり文献研究を広げることによって，客観的な実証の基礎に強固に立たしめて行うこと，それが内田を継ぐ者のノルムではないだろうか。

そして付言しなければならないことは――説明も論証も容易ではないが――，ポーコックの『マキャヴェリアン・モーメント』(1975) の衝撃によって飛躍的に進んだ欧米の「共和主義思想史」研究と「シヴィック・ヒューマニスト・パラダイム」論が，本質的な点で内田義彦の市民社会論と通底する，あるいは共鳴するように思われることである。シヴィック・パラダイムの影響を受けたイグナチェフは，スミスとルソーの思想の交差を問題にしたが，かれの論議の展開は『生誕』を手本にしたかのようでさえある。

談合というコネ社会の意思決定を批判し，独立した個人＝市民の主体的な決断による民主的な社会（→市民社会）の形成をうむことなく説いた内田義彦の情熱は，消極的自由の政治的パラダイムと重なるのではない。もっと積極的な政治，社会，文化形成への

コミットメントを志向するものであったであろう。

この内田市民社会論とシヴィック・ヒューマニズムの関連（まったく同じと主張するつもりはもとよりない）についてもっと立ち入った詳細な論議ができれば生産的であったことであろうが，その点について詰めた論議をする準備は今のところ報告者にはないのが残念である。その昔，羽仁五郎の『ミケランジェロ』を読んで引き付けられたときの印象は鮮明であるが，市民ミケランジェロの像は内田義彦の市民像とどこか重なるところがあるという余韻がいまも報告者の記憶のなかにある。

(注)

R. A. Leigh, "Rousseau and the Scottish Enlightenment", *Contributions to Political Economy*, Vol. 5. March 1986.

Michael Ignatieff, "The Market and Republic: Smith and Rousseau", *The Needs of Strangers*, Chap. 4. Penguin Books, 1986 (Chatto & Windus, 1984).

Do., "Smith, Rousseau and the Republic of Needs", *Scotland and Europe, 1200-1850*, ed. by T. C. Smout, Edinburgh, n. d. (1986).

田中秀夫「スコットランド啓蒙におけるルソー」上，下，『甲南経済学論集』，28-2，3，1987，9，12。（のちに大幅加筆して，田中『スコットランド啓蒙思想史研究』，名古屋大学出版会，1991に収録）

参考：キー・ワード

『経済学の生誕』(1953) イギリス市民社会形成史 歴史の科学としての古典経済学 「文明社会の危機」意識 旧帝国主義戦争としての英仏七年戦争 ウィッグ的全体主義 時論と理論 作用原因と目的原因 富概念のコペルニクス的転回 旧帝国主義批判としての『国富論』 P…P フォーミュラ 物質代謝過程 権威の原理と功利の原理の両面批判

『経済学史講義』(1961) 主体的自然法の論理 客体的自然法の論理

『『資本論』の世界』(1966) 疎外と開発 自然と人間の物質代謝過程 ポジ・ネガ・ポジの手法

『日本資本主義の思想像』(1967) 市民社会青年 コネ型と力作型 純粋力作型とパリア力作型

『社会認識の歩み』(1971) 断片を読む 挙証責任の転換 個体発生と系統発生

『学問への散策』(1974) 読みの構造

『作品としての社会科学』(1981) 視座 澄んだ眼と曇った眼 人文学としての経済学

『読書と社会科学』(1985)　本で「モノ」を読む　自前の概念装置

追記　この小論説は1990年5月26日に関西大学で行われた経済学史学会の関西部会大会の報告であり，筆者は概ね，この小論説を読むという形で報告を行った。この時に「内田義彦の思想と学問」を共通テーマとしてシンポジウムがもたれ，安藤隆穂氏（「内田義彦の近代フランス」），山田鋭夫氏（「マルクス主義と内田義彦」）と筆者とが報告をした。その企画を立案したのは大田一廣氏であった。三人の報告の要旨は『経済学史学会年報』第28号にある（1990年11月，131-2ページ）。その後，筆者はこの報告に加筆して，いずれ公表したいという気持ちをもっていたが，今日まで加筆する機会をもたずに過ぎてしまった。将来，機会をみて加筆し，もう少し本格的な議論をする権利を留保しておきたいが，ここにとりあえず，当日配付した報告要旨を再録することにした。

なおその後，山田鋭夫氏は当日の報告などを基にした「内田義彦論ノート」を発表し（名古屋大学『経済科学』第38巻第2号，1991年1月），安藤隆穂氏は当日の報告とは別の「市民社会と資本主義――内田義彦への一道標――」（『社会思想史研究』第15号，1991年7月）を公にしている。

（1996年1月26日）